

第2号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

編集人 宮崎 榮



一片の雪の中にも
千古の秘密がある
一粒の芥子に
秋三界が蔵されるやうに

(宇吉郎)

雪のいしづみ

平成三年三月七日、地元の新新聞は、中谷字吉郎博士の顕彰碑建立について報じている。

「『雪の博士』として世界にその名を知られた故中谷字吉郎氏の碑が、母校の県立小松高校に完成した。七日、同校を卒業する四百四十七人が贈った記念品で、生徒たちは偉大な先輩の存在を一つの目標にして新生活に羽ばたいていく。(後略)」――北陸中日新聞――

〔前略〕顕彰碑は白みかげ石製で高さ一・五メートル。雪の結晶にちなんで一辺三十六センチの六角形をしており、北海道の方を向いた正面には中谷博士の書で『雪は天から送られた手紙である』と有名な一文が刻まれ、各側面には中谷博士の墓にある雪の結晶が六種類彫り込まれている。井口哲郎校長がデザインした。――北国新聞――

石柱は、博士の「雪華図説」の中から雪の結晶の一つを選んでデザインし、碑文は、丸内中学校所蔵の書を写したものである。

加賀市中島町にある博士の墓は、夫人静子氏によると「雪になぞらえて芙二子(二女)がデザインした台座の六角の面には、一面一面にちがった雪の結晶を彫りこみ、まわりには黒い小石を敷きつめて、北極に浮かぶ氷の単結晶の一片というつもり」だという。

碑の側面の雪の結晶の文様は、中谷芙二子氏の許可を得て転用し、碑の六角の台座の表面に黒い小石を埋めこんだのは、博士の墓のモチーフにあやかろうとしたものである。背景には、記念樹としての寒椿があしらってある。碑の背面に、博士の略歴が次のように刻まれている。

中谷字吉郎 理学博士、物理学者、随筆家。明治三十三年(一九〇〇)、加賀市片山津町生まれ。小松中学、四高、東大理学部物理学科卒業。理化学研究所に入り、寺田寅彦の助手となる。英国留学後、北大教授となり、雪の結晶の研究を始め、日本学士院賞受賞。後、凍土の研究で日本学術協会賞受賞。戦後は、農業物理研究所を設立。雪氷永久凍土研究所顧問研究員として渡米。氷の単結晶を研究。国際雪氷学会副委員長に選ばれる。『冬の華』他、多くの随筆集がある。昭和三十七年(一九六二)没。(氏は中学15回)



顕彰碑と小松高校生

(北陸中日新聞社提供)

関東小松同窓会として新発足

関東支部長 本谷 勇

昔のままの姿での天守閣の城跡を擁する学園は、高校多しといえどもわが母校を措いて他に例はないだろうと誇りに思っています。とりわけ、ふる里を離れて都会の雑踏に身を置く私たちにとって、ある時には疲れを癒し、ある時には勇気を鼓舞してくれる大切な糧となっているのです。

昭和54年秋に中学・県女の全学年と市女20回(全体の名簿が不詳のため)と高校10回生までの会員に呼びかけて、中学2回生の大丸徹三先輩が創設されたという帝國ホテルに二百余名が参集して「関東同窓会」がスタートしたのでした。ところが当会が発足したとき既に東京には中学同窓会(白峯会)や県女同窓会(白楊会)があったために、とりあえず「小松高校同窓会関東支部」と名乗って来ましたが、時折先輩の方から「高校同窓会となっているので、何となく出にくい」などと言われたり、また小松の本部からも「関東だけが高校の二字が入っていて、しかも支部になるのでややこしい。すっきりできんもんかね。」と言われたこともありました。そこで本年六月の総会を機会に「関東小松同窓会」と名称を変更して新しく出発いたしました。

これからも母校の益々の発展を祈りつつ、関東一円で活躍する会員相互の親睦をさらに深めて行きたいと願っていますので、同窓生各位の一層のご指導とご協力をおねがいいたします。(中学46回)

石川県立小松中学校。私の母校である。多感な少年時代の四年間を、私はこの天守台下の中学校で過ごした。この時期はちょうど太平洋戦争のそれとも重なり、暗い思い出もないわけではない。しかし、私が、将来は物理学の道に進もうと思いついたのは、まさにこの時期であったし、しかもこのことを、ほかならぬ小松中学に在学したという事実を負っている。そういうわけで、この時期この母校のことどもが、私の心のうちでは、とりわけ懐かしくそして大切なものとなっている。

私の眼を物理学へと開いて下さった最初の人は、雪の研究で知られた中谷宇吉郎先生である。この中学の大先輩は、私の在学中に二度、講演のために来校された。その講演の一つ―たしか私の三年生の時であったかと思う―のことを、いまでもよく覚えていて、話の前置きとして先生は、先生ご自身がこの中学の五年生のとき、「緯度変化の乙項」の発見で有名な木村栄（きむら・ひさし）先生（天文学者、石川県出身、文化勲章受章者）

寄稿

母校 礼 讃

―二人の先輩のことなど―

中学42回 亀淵 迪

が中学を訪れ、全校生徒に対して講演をされた。当時の校長は、豪放磊落、傑物として知られた妹尾盛親先生で、講演の前に木村先生に対し「相手が中学生だからといって、手を抜いた話ほしないで頂きたい。たとえ生徒が分からなくとも、本当のことを話して下さい」と注文されたという。「そういうわけですから私は、自分の一番よく知っている乙項の話します」というのが、木村先生の前置きであった。

この講演が中谷少年に深い感銘を与えたに相違なく、「私も、この木村先生の例にならって、専門の雪の話します。分かりやすくするため、徒に妥協したり、事実を歪めたりはしないつもりです」と断ったうえで、雪の結晶の写真をスライドで示したりしながら、「水の物理学をめぐって話を進められたのであった。この講演では、また次のような言葉も、私には強い印象を残した。「甲という人が、ある研究を五年間で終え、乙という人は、同じ研究を十年

たつてもまだ続けているとしましょう。この場合に、乙は甲より頭が悪いなどと思っはいけません。皆さんはきっと、水は零度で凍ると思っいでしょすが、零度以下になつても凍らない場合もあるのです。ありふれた水のものでも、調べれば調べるほど分らないことが出てきます。研究とはこういうものなのです」。

物理学という学問が、けつして教科書に書いてあるような、小綺麗にまとまったものではなく、限らない可能性を秘めた、開いた構造のものであることを、私はこの講演によつて初めて知った。

とは、伯父の述懐である。中谷先生の北海道帝大における最初のお弟子さんが、これも中学の先輩の関戸弥太郎先生である。ご承知のように関戸先生は、わが国の宇宙線研究の草分けであり、国際的にも著名な方である。当時、理化学研究所の仁科研究室に居られた関戸先生も、中学に来て講演をされた。その頃としては大変珍しいガイガー計数管で、放射線の検出をしてみせたり、ウィルソン霧箱による宇宙線粒子の写真を示したりしながら、「原子物理学」の解説をされた。

とくに、この霧箱写真の分析から、電子や中間子などの性質が精密に算定できるというところに、私は鮮烈な驚きを覚えた。そしてまた、このような常識をはるかに超えた極微の世界にまでも、人知が及び得るのだという事実に、ひたすら感動した。この講演が契機となって私は、原子物理学の道に進もうと決意したと
 思ふ。
 終戦の年の春、戦禍を避けて、関戸先生率いる仁科研究室宇宙線実験室が、金沢大学（現金大医学部）へ疎開してきた。当時、四高理科甲類の二年生になったばかりの私たち二十名は、勤労動員として、この実験室のお手伝いをするこゝとなつた。ここで私は、いわば関戸先生の下に、正式の弟子入りをしたわけである。そして戦後、名古屋大学に移られた先生を追つて、私自身もこの大学へ入学した。
 学問とは、そして物理学とはどういうものであるかといふことを、私はこの二人の先輩から直接教わつた。人生の極めて早い時期に、こういった機会に恵まれたことは、私にとつてこの上もない幸せであった。そして、このように立派な校長や先輩をもつた母校のことを、私は大いなる誇りとしている。戦後の学制改革のため、この懐かしい名前の学校はもはや存在しない。しかし、母校の名前は、一物理学徒の心のなかに、その経歴の原点を示す道標として、いまもなお昔ながらに生きて
 いる「石川県立小松中学校」。

筆者は筑波大学教授を今春定年退官し、現在、日本大学理工学部嘱託研究員。本文は、会報第一号の井口校長の「母校」文の記事に関連するもので、ご本人のご好意で北陸中日新聞（昭和57年12月6日号）から転載したものです。

卒寿を超えた先輩の手紙

(一)

原谷 一郎

小松同窓会会報が発刊され創刊号を拝受しました。恐らく老生だけではなく全国に居られる皆さんがどんなにかお喜びかと思ひ、この発行企画に努力せられた方々に心から御礼を申し上げます。

私は小松中学第13回生(大正5年卒)の一人ですが、一緒に卒業した55名の方達の殆んどが亡くなられて、今も生き残っているのは私一人ではなからうかと考えています。

私は明治31年(1898)生まれで満93歳を数え、正に前世紀の遺物です。子供の頃からひ弱な体質で色々の病気を患つたのですが、よくもこんなに長生き出来たとは、われながら不思議でなりません。しかし今は心身とも老化が進み、耳は遠く足腰は弱く家中でも杖にすがる始末。しかし何の役にも立たない乍ら、時代に後れないようにと、読書にはいそしむよう心掛けています。

中学時代に先生方から始終偉い大先輩達の話聞かされ

ました。第一回卒の岡田重吉さん(日本の全商貿易金融を扱った正金銀行の常務でパリ支店長)や第二回卒の犬丸徹三さん(帝国ホテルの創立者で日本のホテル王といわれた)や第六回卒の新木栄吉さん(日銀総裁を二回も務め、戦後初代の駐米大使)等の世界的な活躍はわれらの誇りであり、理想でもありました。

私も海外で働くことを願って東京高商(一橋大学)に入學しましたが、病氣や家庭の事情で中退し、その後縁あって郡製糸(株)に入社して、輸出生糸の拡販に専心したのが私の人生でした。世界を廻る機会が数回あって、今でも各国の多くの人々と交友を保っています。もう実務を離れて久しく、老隠居であります。

しかし今でも小松中学で学んだ青春時代の息吹が私の心のどこかで生きています。(中学13回)

(氏はグンゼのニューヨーク支店長等を歴任、戦後はグンゼ産業の社長や会長に就任され、インターナショナル・シルク・アソシエーションの日本代表として輸出貿易の拡大に貢献された。)

(二)

高野 秀三

小松同窓会の会報第1号の発刊を祝し一言御礼を申し上げます。この度母校の記念館前に「北村喜八文学碑」が同窓生によって建てられた由、嬉しく存じます。

私は同君及び中谷吉郎君と同期でした。両君ともに秀才で、いつも上位二、三番を占めて居りましたが、私は下位で、卒業のときは下から五番目位でした。たゞし地理と体操だけは優位でした。

両君ともに早く亡くなられましたことは惜しいことでした。私は鈍才で未だに元気で居ります。今年93歳ですが、まだ生きられる公算がありますので、小松同窓会の会報が続けて発刊されることを希望しています。関係の皆さんお願ひします。(中学15回)

俳句

青雲の小徑にて

沖谷敏子(県女17回)

青雲の小徑のゆくて虹五彩

若きらの声のこだまを葉桜に

蛇の衣見し日も遠し天守台

◆児童生徒の減少傾向の始まりで今年度から一クラス減になり一年生九クラスでスタートしました。

◆今年石川県体が開催されます。本校もラグビーと体操の会場になります。そのため二学期を三日間繰り上げ、八月二十九日より新学期を開始し、夏季国体の九月九日と秋季国体の十月十二日・十四日を休業日として、大会のお世話を観戦に当てます。

◆国体は会場になるだけでなく、本校からも石川国体強化選手が指定されています。

学校だより

ボート女子六名、カヌー男子四名、陸上男子、バレー男子、山岳男子それぞれ一名が選ばれ目下猛練習中です。先生方も昨年の国体ボート、ナックルフォア二位の橋本竜司教諭がオリンピック出場の前口英明選手と組んで、ダブルスカルで優勝をねらいます。その他にも監督やコーチや大会役員等で多数の方が頑張っています。

◆インターハイはやはり高校生の全国大会、今年もボート、カヌー、山岳、トランポリンに出場します。

◆文化部の方では、ブラスバンド部員がますます増え、六月十五日に恒例になった定期演奏会、第十九回饗宴を小松市公会堂ホールで開催しました。昼夜2ステージで約二千五〇〇人の入場で大盛況でした。

◆本校の伝統行事である校内ボートレース大会は今なお連続と続いています。逆水門に続く前川で、艇も昔ながらの「かが」「こまつ」「しらね」等を使い夏の一日をクラス対抗レースで楽しみます。今年は七月十七日の予定で毎日放課後梯川でクラス毎に練習しています。

◆卒業生の大学合格状況は、国立は金大60、富山43、京大14、静岡12、東北9、阪大7、千葉7、筑波6等計265名、私大では立命31、関西31、同志社25、日大25、法政19、早大15、明治14等でした。

来春も文武両道で頑張ってくれることでしょう。

杳かなる回想

松崎 茂夫

わが小松同窓会には創立八十周年記念回想録がある。昭和54年10月刊行、以来早くも12年の歳月を経過したが、

よくも集められたものだと感心する程の珍しい各種記念写真と、当時存命中の同窓諸氏の回想追憶文に満ちみちて、これを繙く毎に懐旧の思い切々たるものがある。中学24回卒の私はこれに「松嶺とその誌友回想」なる一文を寄せているのだが、その指導教官であった旧師佐野保先生の、私が直接寄稿をお願いした「杳かなる思い出」が載っている。

その末尾に『私も学校の年令と同じ現在80歳、8年前脳血栓で倒れ、未だに病床を離れきれず、この記事も口述筆記により、わずかに私の気持ちを吐露している』云々と我々24回・25回生の『松嶺』誌友の名前とその思い出が切々と綴られている。この佐野保先生は、御家庭の事情から昭和4年8月俄かに小松中学を辞して、父君が住持をされる九州の寺へ帰住されたのである。以来佐野前光と号されて、宗

祖日蓮聖人御真骨奉安の地、鎮西身延山本佛寺の法主として、九州一円の担信徒並に数

多法弟子の尊崇教導の中心として長く且つ尊い生涯を送られ昭和58年1月遷化されたことである。

佐野前光先生のこの「思い出」の中に『以来三十余年が経過してしまった、その間一日として忘れたことのない小松を、妻と共に訪れたのであった。簡単にそのことを松崎君に連絡して小松駅に着いてみると、何となつかしい顔々がずらりとホームに並んで迎えてくれた。私は耐え難いなつかしさが涙となつてこみあげてくるのをどうすることも出来なかつた。……』この時の記念写真を探し出して見ると、『43・5・26 小六にて、前光和尚御夫妻の来遊を迎へて小中25・26回卒業生らとの昼食会、夜は24回卒業生を

「かみや」に集め旧情を暖む』とある。先生御夫妻の両わきに森茂喜君と私が座し、その左右と背後を村木・繩・小川・和田・越中・栗津君ら他四人が囲んでいる。この世のはかなさ、この後23年間に亡き数に入つた者の何と多いことであらう。

あろう。

私の書架には昭和50年1月先生から惠存を受けた『共産圏の旅』がある。また同2月刊行奥様とき江女史との共著『佛跡に頼づく』がある。前者は宗教を阿片なりとして排撃する唯物論と共産主義の施政下にある諸国民の、人間と

詩

茅原

金戸隆幸(中学46回)

その時も 青い 青い空
すき透る水に

株間の砂模様がきれいだった

草笛を吹くと

少年の日の茅原が

大きく 小さく波打つ

緑の茅原をあとに

眺の 遠い 遠い空に

消えて行つた「飛行機」

「飛行機」

しては断ちがたき宗教心故の心の悩みを些細に観察し同情せられていて、信教の自由に甘えて神の存在さへ忘れてしまつている自分を反省させられたことである。この佐野前光師の本佛寺を昭和61年3月、妻を伴い九州ドライブの旅を試みた折りに訪ねることが出来た。予め連絡していた同級の学友狭場竜夫君が出迎えてくれて、本佛寺に詣で、故先師の展墓を果し得たこと、広い山腹の境内を長い渡り廊下で辿りつゝ、同寺宝物館の数々の陳列品の中に、なつかしい「松嶺」が全冊揃つて並べられていたことなど、書き綴りたいこと山々だが、今回はこれで止めることにしたい。(中学24回)

同窓誌のすすめ

後藤 長平

こと旧聞であるが、中学37回生は昨秋の十月、卒業五十年の記念同窓会を開いた。懇親会に先だち、ホテルの会議室で名号を掛け法名を掲げ、花を供し香を薫し、読経して物故者の追悼法要を営んだ。在学中の物故者をふくめ三十三名が鬼籍に入り、生存者は五十三名であった。(その後また一名死去)

これを記念して小誌を発刊したところ、とても同窓生一同に喜ばれた。還暦もすぎると、いや古稀にも近づくと、いやに少年時代がなつかしく、他郷にある友は故郷のことが一層思われるらしい。そのた

めにも是非、各回の同窓誌の発刊をすすめる次第である。私が編集したのは、ごく些細なものであつて、B4の6ページだでの新聞型式である。生存者全員に、百字程度の近況か随想を投稿してもらい、次に同窓生全員の写真を掲載した。その写真は、五十年前の卒業当時の交換写真である。四年修了でない人は、中学時代の写真とした。大きさは、3.5センチ×5.5センチに縮小した。近年印刷技術が進歩したため、とても明瞭でその風貌たるや、白髪禿頭の老人も紅顔の美少年のころが偲ばれ、一同今さら年月の早さにおどろくばかりであった。

この様な企画は中学33回・36回・43回生も発刊されている。それも冊子の大変豪華なものである。他の回にもあるやもしれぬが、真聞にして聞きもらしている。最後に中学37回生は、今秋関西で同窓会を開くことになつている。諸君万障繰り合はして参集あれ。(中学37回)



最近思ふこと

永井 宏明

還暦を過ぎて早くも五年、最近急にカゼをひき易くなり、冬期三〜四ヶ月間は、治ったかと思うとまたカゼをひき、これのくり返して春をむかえるような状態です。幼稚園から小学校の頃は虚弱児童で、お正月は必ずと言ってよいくらいカゼをひき、三十八〜九度の熱で除夜の鐘を聞き、元日の四方拝は殆ど病欠の状態であったことを記憶しております。昔は小学校の養護室に太陽灯というものがあって、水銀灯による紫外線照射に使用されたもので、虚弱体質の児童によく使われたものです。授業中に順番がきて、呼び出しがかゝり、授業を途中で抜け出すのが嬉しかったものです。

ところが小学校を卒業し、中学(昔は五年制)に入学した途端に健康になり、極く最近迄は減多にカゼをひかず、かゝっても一日で治ってしまふ状態でしたが、六十才を過ぎてからは、小学校の頃の体質に戻ったのでしょうか。早速、還暦という字を広辞

苑で調べてみました。本卦還(ほんげがえり)、華甲(かこう)とありました。本卦還はその人が生まれた干支(えと)にめぐりかえること。華甲の華は十の字六つと一の字からなり、甲は甲子の甲で歳の意とありました。即ち六十才になれば生まれた年に帰るということで、御多分にもれず私の身体が証明してくれました。

三〜四千年前に、年月日その他の数学にかゝわるものとして使われた十千十二支が現在の私達の身の回りに生きていることが判りました。

六十代は「はなたれ小僧」と言われる今日此頃、年に負けずに頑張りたいと思っております。(中学41回)

大鼓との出会い

嘉宮富美子

私が四十歳にもなり謡曲と小鼓を習い始めて三、四年過ぎた頃のことでした。公会堂でお能があり、それを見に行った時のことです。先代の飯島先生にバツタリお会いし「先生とても素敵でした。その鼓良い音がするんですね」と申しましたら「これは大鼓と

云うんだよ、貴女も打って見るか」と先生がおっしゃるの。私は「女でも打てるのですか」と聞くと先生は『あゝ打てるよ。誰だって打てるよ』と無造作におっしゃって、そのまゝ行っておしまいになりました。その後、三ヶ月経った三十六年の八月のことです。突然先生が訪ねて来られました。「大鼓を教えに来たんだ」とのことに私は驚いてしまいました。先生は羽衣のクセをノートに書いてそれに手付を入れたのを持参され説明して下さいました。其頃はテープなど無かった頃ですから「三ツ地」「つゞけ」の間を取るのも大変。新年会迄にやっとなり一ツ覚えただけでした。先生は根気よく月二回必ず来て下さいました。一緒にお稽古するお友達も増えて面白くなって参りました頃、習い始めて十五年目に、先生は亡くなってしまわれたのです。其後は今の佐之六先生が後を見て下さいました。それからもう十五年本当に早いものです。「大鼓を習って何になつた」と聞かれたら、私は一番に楽しいから、それに練習している時は、何もかも一切の雑念

を忘れ去ることが出来るし頭の体操と答えるでしょう。今迄元気に居られたのも多分は大鼓のお蔭。ほんの一寸したきっかけから私は本当に幸いでした。些細な出会いを大切にしたいものです。(県女18回)

芙蓉会

北村 利子

新しく建った市庁舎が威容を誇っているあたりに県立小松高女がありました。

中庭をはさんだ口の字型の校舎には、南側の中央に職員玄関があってその入口近くに、初夏になると芙蓉の木が真白い清楚な花を咲かせました。その情景が印象深く今も懐かしく思い出されます。

夕づけば芙蓉の花の白きよりなほしろき君が面輪のうかぶ

この歌は大杉幸子(旧姓藤野)さんが小松高女在学中につくられたものです。

十数年前、未だ名前のなかった私達のクラスに名前を付けようと話し合った時、誰言う

となく「芙蓉」の名が挙げられ、大杉さんの歌が自然と口

ずさまられて、皆の総意で二十五回生は「芙蓉会」と名を付けました。幾十年経っても校舎のそばにあった芙蓉の花が、みんなには忘れられない思い出の花であったのでしょう。私達の芙蓉会は本当に気の合った仲間が集まりです。年二回の集りは桜の名所を訪ねる春の旅行と、秋の紅葉を賞でてのクラス会で、遠く北海道、関東、関西からも参加され女学生の頃と変わらぬなごやかで愉快な会は他には見られない楽しいものです。昨年のクラス会の帰途、皆が揃って小松高校へ寄って「青雲の小径」をそぞろ歩きました。青雲の志を称揚する本陣先生の碑に感動し、桜並木の若木に明日を信じ、天守台の老松に悠久の歴史を感じました。「今までは母校でないのに、遠い存在であった小松高校が身近なものに感じられて小松同窓会員としての誇りを持つことが出来た。」とは三々五々帰りながらの皆の述懐でした。(県女25回生)



お天守台の土筆

元田 昭子

去る四月十一日圭子さんの御招きで、久々に帰松致しました。その節どうしても天守台をゆっくり見たくて(私達の青春時代の県立小松中学校は、秀才且つ強い方々の男子校で、女子は近寄れないと決まっていた)「青雲の小径」を歩きました。一人が「あつ土筆」と呼びます。とても?十歳とは思えない声です。「まあ!本当」とこれ又同じ声の三人です。やっぱり県立小松高女出身です。この何の変哲もない石積(ゴメンナサイ)の近くへ来ただけで、四人共嬉々として居るのです。

他県の方々には判らない何かが!!セーラ服装に戻った春爛漫の一刻。満開の桜の懐かしい芦城公園を通り抜け一路山代温泉へと向かいました。青雲の小径桜も若木なり新緑や着て見たとき色雨に濡れ

(県女32回)

思い出すままに

伊勢 純江

先づ略歴を申すなら、県女

36回卒と高校第1回卒とである私達は、尋常高等小学校に始まり、国民学校となり女学校、新制高校で学業を卒えた。

戦中戦後、私達は何を学んで来たのだろうかと思う事がある。大和魂をたたき込まれ、従うこと、何も云わない事が良いとされ、だまって勤労働員に狩り出され、学業を捨て工場で働き、無我夢中で終戦を迎え、戦後は、何もない中で与えられた自由と民主主義。そして男女共学が是か非かとただウロウロしながら新しいものに向って突き進んで行った。そんな時代が私達の青春だったのではないだろうか。今の若い人達には体験出来ない戦中戦後の大変動を身をもって感じ取って来た私達の世代、ある意味ではすばらしい時代を生きて来たのであった。耐える事も、楽しい事も知り、古いことも新しいことも経験したそんな年代。昭和五年午

歳生まれに幸あれ。その昔、丁度今頃、旧海軍航空隊へ動員され、チビた下駄で通った思い出の基地で、現在の第六航空団司令と知り

合った。氏に「茶杓に銘を」とお願いしたら、フランス通

制服の変遷



(県女30回 中川登志子提供)

のお方故、「セ・ラ・ヴィ」とフランス語で銘がついて来た。「人生とはこんなもの」との意味で、自から茶の心に通ずるものを感じ、"ありのままに"と云いかえて納得した次第です。二十一世紀に向かって、若々しく美しい心で、ありのままに大らかに生きたいと願う今日この頃である。小松同窓会万歳!(県女36回)

生きる欲び

和田 清子

昭和四年学窓を巣立ち在学中の楽しかった思い出の数々を胸にすごした青春時代、四人の子供達も次々と基地を飛び立つように家を出てゆき、主人と二人取残され、賑やかだった家庭も淋しさを感じていました。それぞれ結婚でいそがしい思いをし、孫の出生で安心を喜び合った人生。その間、私は主人の理解のもとに校下の婦人会長、農協婦人部の役を務め常に家をあけて会合に出かけ、施錠をしていない時は町内の方や知人がたずねて下さったものです。多忙なわけでしたが、市婦連の旅行に参加したり、沢山の山の方々と交流を深め、楽しい思い出も一杯でした。婦人会長をやめほっと一息ついた時、胃癌にかかり、金大附属病院で手術をうけ早期発見・治療で健康を回復し十五年の年月を経過しましたが、異常がなく喜んでおります。苦楽を共にした主人も病氣勝ちとなり入院を繰り返しの生活となり六年前に亡くなり、独り暮らしとなり十六年前に地域の

短歌

藤場ふみ(県女17回)

雪かづき掃りぐともなき庭の松 静寂のなかに樹齢を重ね 縁の無き佛をかくし戦ぎゐる 荒地野菊の丈高々し

寺に仏教婦人会が出来、乞われるままに御世話をする事になり、ちょい／＼お寺へ出入りしております。主人の亡き後子供達の家族が夏に帰宅し、冬には私が出かける状況を繰り返しております。元気な時は茶道、和裁を若い人に教えたりして若い人との交流をしましたが、体も年毎に疲労し、現在は趣味の茶園作りと草花を育て家のまわりは雑草と花がお互いに競い合って生育している状態ですが、体力に応じて体を動かし老いにまげしと頑張り、健康には重々留意し、心豊かに若い心を持ち、楽しい日々らしをしております。(市女3回)

遠方の皆様へ

泉 たえ子

四十七、八年振りに彼女(旧姓岡本節子)は北九州市の戸畑から訪れた。名簿作成で世話になった中橋さん(旧姓徳田秀子)にお礼を言いたいのと連絡が来ていたので、三人で芦城公園に付つ。夏帽の彼女は石垣に触れたり、タブの樹を仰いだりして気持を整えているらしい。小松城三之丸の名残は今も博物館前の

右隅に位置する腰の高さの石垣と、のきしのぶが房々と生い宿るタブの一樹である。

タブの樹は知っている。昔中学、県女、市女の生徒が学舎から菟橋神社まで、戦勝祈願に列をなして歩調をとって通ったことや、登下校の際足早に通り過ぎた当時の若者の様子を。そして今も後輩の高校生が公園を訪れている。

暫らくして彼女は故郷がよかったとしみじく喜んで来た。こうして小半日、自然の環境にひたり昔を偲んで友情をかみしめた三人でした。

桜落葉 音 おとたて、
踏みにけり
(市女15回)

戦中・戦後

北村 昭子

私たちの学生時代は戦争と切り離して考えることは出来ない。セーラー服の女学生に憧れて入学したが、戦争が苛酷になり物資が不足になったので各自が家庭にある着物で裁縫の時間にへちま袴の制服を縫ったり、スカートの代りに、着物をモンペに更生した自給自足の制服であった。空襲に備えて防空壕を掘っ

たり、机や椅子を犬丸小学校まで運んだり、軍需工場へ兵器製造に通い、空襲警報におびえて過ごした揚句の八月十五日の終戦であった。学校の体育館で校長先生が泣き乍ら終戦を告げられた時は、これからどうなるかと不安で一杯でした。

終戦の一番明るいニュースは独立校舎に入れることであった。稚松小学校から下牧町(元小島小学校跡)まで校舎の移転に伴い、歩いて物を運搬した時の辛さを思い出す。

しかし翌年からは不自由な中にも落着いて学習できるようになり、クラブ活動が一部の人々であったが始まった。就業年限も2年制から3年制へ、更に新制高校編入と学制改革の波に揉まれた時代でもあった。
(市女20回)

高齢化時代への手がかり

中田 郁夫

小松市が全国の平均より四、五年先を走っているもの―それは高齢化だ。六十五歳以上人口が四・一％だから計算上そうなる。高齢化そのものは恐れることではないが、ねたきり老人、痴呆老人、

要介護老人の増加となれば、その中味として問題であろう。

現在の高齢者対応と、将来の高齢化対策を支持したばかりで、現状把握も、将来展望も語れる筈はないが、国の「21健康長寿のまちづくり事業」の指定を受け、「高齢化対策課」を設け、「すこやかサンセット十ヶ年計画」の策定に踏み出している市長の先取りに感心してばかりもいられず、その具体化に取組むのが私の役まわりと思いついてる。

「十ヶ年計画」では、高齢化時代の認識を「健康と福祉」「教育と雇用」「住宅と環境」「女性と家庭」の問題だとする着眼は大変ユニークで、具体的な整理の仕方だと評価している。

東部丘陵地に展開しようとしている「小松健康の里」構想の中で、今着手されようとしている千木野住宅団地は、この「住宅と環境」をテーマに新しい街づくりを試みようとしている。やがて「憩の森」に隣接して老人はもとより子供にも身体障害者にもやさしい街、通過交通に悩まされない歩行者優先の、広い遊べる

歩道を備えた段差の少ない、緑蔭と陽だまりが配置されたハードと、三世代交流や既存市街地との交流を可能にするソフトを併せもった街、これまでの宅地開発といくらか違う手法による街が出現する筈である。

こんなことが高齢化時代への対応の手がかりとなれば幸いだと思っている。(高校6回)

パリで102面打ちに挑戦

日本棋院七段 白江 治彦

今は、コンピュータゲームなど子供の楽しみは多彩ですが、昔は大人は囲碁、子供は将棋というのが定石でした。それが、どういうわけか中1の夏休みに親父から碁を教えられまして、最初は星目風鈴(段違いのハンデ)でも負けて、盤面に涙をポロポロと落ちていたのですが、そのうちに腕を上げ、1年近く経ち、初段(勿論アマ)くらいの頃、小松市内での囲碁大会にはじめて出て優勝し、すっかり碁のとりこになりましたわ。その決勝戦の相手が当時の高校の絵画の前坂先生でした。(息子の雅男君とは同級)

高校時代の思い出は、教科

書の上に碁の本を置き、先生にあてられると周りの友情？でしのいでました。

又、2年に進んでからですが毎金曜の夜行で上京、土日の2日を東京で院生(プロ修行)に励み、月曜日の朝小松駅から学校というくらしを1年あまり続けたこともありました。

2年の中で中退、18歳までという年齢制限にあと1年(年に新規入団3名)というときでしたが、ワンチャンスで合格しました。(私の誇れる数少ない記録)

それから三十数年、いろいろありましたがNHK囲碁講座などテレビでの囲碁普及に声をかけてもらいました。毎日碁チャ碁ちゃんらしを送っている次第。

昨秋体育の日、銀座の歩行者天国で101面打ち(一度に101人の相手と打つ)をやりましたが予想以上の好評で今夏エッフェル塔下で102でやります。(フランス囲碁協会より101ではギネスに載らないからとの要望あり)

このフランスに限りませんが欧米での囲碁熱はかなりのもので、過日金沢での世界大

会でオランダ代表が3位(日本・中国に勝つ)になったほどの高いレベルですよ。

毎年、ヨーロッパをはじめ諸外国へ指導にでかけますが、言葉には不自由しますね。高校時代基督教ばかりで語学の方をないがしろにした罪ですね。

(橋本前校長をはじめ何人かの基キチの先生方には免状を推薦上げたこともあります)

(高校8回)

燃えた青春で得たもの

森田 和

在学中は、文化部三、運動部一に所属し、勉強は二の次という、それは楽しい青春を過ごしました。

PFC(郵便友の会)ではコッコツと原紙をおこして会員名簿を作成、全国の学校へ送り、一杯手紙が来て感動したり、大勢のペンフレンドと青春の悩みや、熱き想いを交換しあい、キャンプやフオークダンスで友情を深めあい、幸せな忙しさを味わったのです。

手芸、書道クラブでは、文化祭の庭に道楽者の何とやらで徹夜で製作し、毎年目もろいになり恥ずかしい思いをしました。三年間の作品は青

春の証です。

中でも忘れないのが、福島インターハイで入賞できたポーター部の事です。水の上をスイスイと人目は涼しそうな練習ですが、太陽はギンギン、水はあつても飲めず、五人一チームで一人として気を抜く事の許されぬ川の上、あの時に培

われた根性は、その後の人生にプラスになっている事は言うまでもありません。今でも、先輩、後輩達と集う時青春の汗と涙を流した同志であり、合宿での楽しかった事を、思い出させてくれます。

学生時代を、め一杯謳歌し、悔いなき青春を過ごした小松高校で、私はたくさんの「友」という生涯の財産を得たのです。

(高校13回)

夏の楽しみ

福島 洋

10年程前まで、私は野球というものは家でゆっくり寝そべり、ビールでも飲みながらテレビで観るものだと信じていました。それまで全く野球とは縁がなく、少年時代に、やれ長嶋だ稲尾だと騒いで草野球に興じた事がある程度でしたから、大人になってから

も、もっぱらプロ野球専門でした。ところがある高校でたまたま部長として野球部の世話をする羽目になり、それが当人達も驚いた事に、甲子園に出場したものだから、それ以後はおのずと高校野球に目がいくようになったのです。

その後、野球と離れてからも、よく球場に出かけて行くようになったのですが、帽子とタオルを持って出かける私に、家の者は「よくまあ、わざわざこの暑い中を」と憎まれ口をきいたりするのですが、しかしスタンドで観戦する楽しみは、野球の感激を知らないものには分らないでしょう。ましてヤスタンドで観戦する気楽さは、ベンチの中で選手の攻防を見守っていた時の胃の痛さとは較べようもありません。

ところで、今年もまた夏のシーズンが近づいて来ました。五年前、きつと全国の同窓生諸氏が母校の甲子園出場に胸を踊らせた事でしょう。幸い今年も我が校チームは有望であり、私も秘かに期待している一人です。開幕の陽差しがさしたら、ぜひ諸氏も帽子とタオルを持って球場に

出かけて見てはいかがですか。

きつと懐かしい青春の一コマが待ち受けていると思えます。選手諸君の健闘を祈って!

(高校20回)

不思議な国のありす

松本 邦裕

突然、目前に「奇異」なるファッション。不経済な布地をたくさん使った妙なヒダヒダのついた袴のようなものに、やたらデカイ袴、リボン状に結ばれたスカーフみたいなもの。男子の方は趣味の悪いボタンに息苦しそうなデザイン

の袴。これがなんと91年の小松高校のユニフォーム。こんな不気味なことが!しかも長年こんな状態が平然と続いているとは!?どうして我が国、特に我が地方には不思議現象が多いんでしょう!?

分野でさらに非創造的発想。

電力の問題一つにしても原子力でしか解決できないと思ひ込ませようとすると貧困な思考。もし本人がそう信じているならば更に救いようがありません。大人も子供も自己を発見する努力をすべしだし高校教育もその手助けをする場であつてほしいと思ひます。しかし制服や校則に慣らされ感覚がマヒした「安全」な人間があとからあとと造られていくのが現実のような気がします。高校時代は「教育」の流れを変えたいと思ひていました。「大人」となった今、我々の手で大胆に流れを変えて行くことは可能です。(高校24回)

お天守

上田 康裕

天守台で我が子を遊ばせていると、ふと自分も30年前、おやじにつれられて遊びに来ていた頭が思い出される。

庭の塀を飛び越えれば小松高校という我が家。小さな頃から毎日のように遊びに来ていた。30年の間天守台の石垣は、ずっとそのままである。その回りは、といえ、草が刈られ小公園として整備され

グラウンドもできて春の町内運動会が毎週行われている。田んぼが消え家がぐるりと天守台を囲んでしまった。

新しい体育館が次々と建てられ、古い建物が一つ一ついつの間にか消えていった。木々の数も卒業記念に毎年植えている筈なのに逆に少なくなっている気がする。けれども毎朝小鳥のさえずりが聞こえることを思えばまだ自然が大切にされているのだろう。

野球部も立派になって毎晩遅くまで雨天練習場からティーンバッティングの金属音が響いて来る。今年は成績が良いみたいだ。バッティング練習も熱が入っている。練習用のボールさえ満足になく、練習が始まったのも9人そろわない、長髪をなびかせてプレーするそんな野球部があったことをもう誰も知らないだろう。

熱く燃えた青春時代、三年間という時間はあまりにも短か過ぎて、ただひたすら何かを求め続けていた日々。何を求めていたのか、それは今もわからない。そして今現在もひそかに求め続けているような気がする。

もうしばらくすると運動会

の応援練習が始まる。運動会も天守台の石垣同様ずっとそのままである。学生諸君、今年も熱く燃える心で盛大な運動会をお願いします！
(高校28回)

ポート生活の思い出

坂田 昌弘

母校を卒業して丸10年、こうして原稿を書いているとつくづく早いなと感じる。梯子でのポート部の練習が懐かしく思い出される。小学校のときからの友人と一緒にポート部に入部したのがきっかけで社会人となった今でもポートを漕ぎ続けている。当時「高ポート部」といえば県内No.1の実力を誇っていた。6限目の授業が終ると清掃もいっ加減にして梯子沿いの艇庫へ、慣れないうちは手の皮がむける、尻の皮がむける、散々だった。またコーチからは「毎日飯を10杯食べろ」と言われ、強くなれると信じて真面目に実行し、涙を流しながら食べた友人もいた。高校生だからこそできたのだろうと今もって感心する。また進学校であったためか試験の何日か前から部活動は中止であったが、ポ

ト部は学校から離れていて先生の目が届かなかったので、各人が自主トレという名目で艇庫に集まり練習した事を思い出す。それでも何かかポート部には成績のいいのが沢山いた。3年生のインターハイ前には恒例の補習授業があったが、早朝と夕方に練習するため疲労困憊、一番前の席での授業も眠っていたが、先生もあえて何も言わなかった。かくして、高校部活動の総決算、インターハイ(愛媛県、鹿野川)も準々決勝で敗れて、高校でのポート生活にも終止符が打たれたが、何か澄みわたるような良き思い出として心に残っている。(高校33回)

新しい環境になって

北元荘乃美

今年、小松高校を卒業してそのまま臨時職員として事務で働かせていただくことになりました。そのせいか社会人になってもまだ少し学生気分が残っているようです。ほんの数か月前までは制服を着て校内を歩いていたのが、今度別の制服を着て同じ校内を歩いていると学校の雰囲気もどこことなく違ってみえます。



川柳 (特別会員) 吉田秀哉

棺を抜きたれかの首を仮想する
死に神が夜具の四隅にいる安堵
職業を無しと書く日の峰動く

を焦らずマイペースでやっていきたいと思います。

(高校43回)

さがしています

「白峯」のバックナンバー

小松中学の校友会誌「白峯」は明治39年に創刊されて昭和13年(57号)まで刊行されたもので、その殆どは学校図書館に保管されているが、途中の8冊が欠けています。学校当局も色々手を廻してさがしている処ですが、その頃に在学されたご家族をお持ちの会員皆さま、一度お宅をお調べになって下さい。

◎第16号(大正5年6月)から

◎第24号(大正9年3月)まで

見付かりましたら学校までお電話下されれば、お借りに参上し、コピーしてお返しいたしますので、よろしく。

◇ ◇ ◇

◎大正8年頃の中学生徒による文芸同人誌「甕音」

この本は中谷宇吉郎氏の弟(治字二郎)さんが編集されて、その内容について芥川竜之介が絶賛されている大変貴重なもので、加賀地区のどこかにある筈、ご連絡下さい。

(学校事務局)

卒業記念樹は今

小松同窓会は、明治37年に
中学の第1回生を送り出して
以来、今年の高校第43回生ま
で、全国でも珍しく同一の場
所に学舎が続いています。広
い敷地にそれぞれに残した卒
業記念樹は威を經て大樹となっ
ても、石碑とともに健在のも
の多いようです。

石碑を頼りに、記念樹名を
あげて見ます。石碑が動い
てしまつて誤っているものもあ
るかも知れません。中学の後
半は見当たらず、植えなかつ
たのか、見失つたのか分かり
ません。当時を思い起こされ
て、もし記憶に残っていますし
たら、事務局までご一報願え
れば幸に存じます

〔中学の部〕

(卒業年次) (樹木名) (場所)

- 11回 マツ (卒業50周年) 記念館前
7回 ラカンマキ 駐車場
13回 マツ (卒業50周年) 天守台
15回 マツ 駐車場
18回 ラカンマキ 前庭東
20回 ラカンマキ 前庭西
22回 ゲツケイジュ 前庭東
23回 ボケ(マツ卒業50周年)記念館前
24回 シイノキ 中庭
25回 ヒノキ 記念館前
27回 モミ 前庭東
29回 イチョウ 同窓会館西
30回 キョウチクトウ 中庭
39回 アラカシ(卒業30周年)前庭西
41回 ラカンマキ(卒業30周年)前庭東
42回 ラカンマキ(卒業30周年)前庭東

〔高校の部〕

- 4回 モミ 正面西
5回 ゴヨウマツ 中庭
6回 ヒイラギ 前庭西
7回 ヒイラギモクセイ 正門西
8回 ニシキギ(モチ卒業30周年)正門西
9回 三葉マツ 正門西
11回 シイノキ 前庭西
12回 シイノキ 同窓会館西
13回 タライヨウ 図書館北
14回 ヒマラヤスギ 校舎西
15回 ヒマラヤスギ 校舎西
16回 コウヤマキ 校舎前
17回 ハクモクレン 前庭西
18回 ヒマラヤスギ 校舎東
19回 ナツツバキ 正門西
20回 ゲツケイジュ 正門西
21回 スズカケノキ 弓道場
22回 モッコク 前庭西
23回 ツバキ(八重) 正門西
24回 アシビ 正門前
25回 ノムラカエデ 正門西
26回 キンモクセイ 正門東
27回 モクレン 前庭西
28回 クロマツ 前庭西
29回 ツバキ 前庭東
30回 カリン 前庭東
31回 トチノキ 前庭東
32回 サザンカ 前庭西
33回 クロマツ 前庭東
34回 イチイ 前庭西
35回 センダン 正門東
36回 サルスベリ 正門東
37回 クスノキ 正門東
38回 ウメ(紅・白) 東門
39回 モミ 前庭東
40回 アメリカハナミズキ 図書館北
41回 ライラック 記念館前
42回 モミジバフウ 記念館前
43回 カンツバキ 前庭西

本部だより

◆平成二年度小松同窓会新年
会は、一月十八日小松グラ
ドホテルを会場に開催されま
した。午後六時半開会、出席
者は百七十二名、江口介一氏
(高17回)の司会では滞り
なく進められました。松崎茂
夫氏(中24回)の首頭で乾杯、
伊藤清雄氏、増田金一氏、福
村章氏、中口清栄氏のスピー
チの後、和やかに歓談、中学、
県女、市女、高校の校歌を斉
唱して宮川恒氏(中26回)の
首頭で万歳を三唱、散会しま
した。◆去る三月七日、第43
回卒業式が行われ、小松同窓
会は新に四百十七名の新会員
を迎えることになりました。

若き新会員諸氏の今後の大い
なる活躍を期待したいもので
す。◆「青雲の小径」の桜並
木はこの春、例年になく見事
に花を咲かせ、生徒諸君や市
民の目を楽しませてくれまし

第3号の原稿募集

た。昨年植えられた若木たち
も幹がひとまわり太くなり、
順調な発育をみせています。
老樹と共に美しい花を見せて
くれる日のことが楽しみに思
われます。◆関東小松同窓会
では、第五回関東小松同窓会
総会が六月一日、帝国ホテル
富士の間に於て開催されまし
た。出席五百二十四名にのぼ
る盛大な会となり、本部から
も会長の仲井信雄氏(中42回)、
井口哲郎小松高校校長、また
世話役として那谷忠雄副会長
他10名が参加されました。席
上、関東小松同窓会誌「天守
台」が出席者全員に配布され
ました。◆関西小松同窓会で
は第3回関西小松同窓会総会
が六月十五日、中央電気倶楽
部で開催されました。出席者
は二百三十名にのぼり、本部
から会長の仲井信雄氏、粟谷
外志久小松高校教頭が出席さ
れました。◆平成三年度第一
回常任理事会が去る六月七日、
小松高校同窓会館に於て午後
七時より開かれました。45名
が出席、平成二年度決算報告
および監査報告、平成三年度
予算案の審議の後、平成三年
度小松同窓会総会について話
し合われました。

会員皆さんのご協力で増頁
にして夏の総会に間に合せて
刊行できたのを感謝。卒寿を
超えた二人の大先輩の手紙を
原稿にさせて頂く、益々のご
長寿を祈るや切。卒業記念樹
一覧は東先生の調査によるも
の、一度校庭のご散策を。(M)

あとがき

◆同窓会担当だった矢原先生
が校務分掌の異動で次の方々
と交代されました。長い間本
当に有難うございました。
東 徹哉先生(高校11回)
田辺広美先生(若狭出身)
藤田紀子さん(高校24回)
新任の方々今後よろしく。
◆会報委員に次の方々
三島明子さん(市女21回)
杉永信孝さん(高校18回)
新しく会報委員に加わって頂
くことになりました。